

1. 問題の所在

ICTを正式に言うとして、Information and Communication Technology となるらしい。ために知人の国語科教師(若くはない)に正式名称をクイズで出したら、「インターネット・コンピュータ・ティーチング？」という回答があった。言い得て妙ではあるが。

高校の国語科の教師の実態は、この領域の先進県、先進校でもない限りこのようなものである。タブレット端末、電子黒板、デジタル教科書などが時代の寵児として登場し、文部科学省の肝いりで産学が一体となって普及に努めてはいるが、まだその認知度は高いとは言えない。構造的な原因はさまざまあるが、ただその活用を見いだせていない、というのが一般的な理由であろう。何のための導入なのかを見誤ると、仮に取り入れたとしても、方略が目的化した活動主義に陥る。その兆しはすでに現れ始めているのかもしれない。「別に紙で十分なのでは？」「そのツールって本当に有効？」「そもそも学習者に何を学ばせたいの？」というクリティカルな問いがなければ道を誤ると思うのである。

社会文化的なコンテキストへ従来の国語科を拡張していくことである。小説であれ評論であれ、それらを著者と読者とをつなぐメディアとして捉え、テキストをメディア教育的視点から読み解いていくのである。たとえば、そのテキストが生まれた時代の背景とトピックの関係性を考えることや、想定された読者を考えること、また作品に仕組まれた仕掛けを謎解きしていくなどの学習である。これらは教科書という印刷テキストだけでは解決しない場合がある。

3. 「授業中にスマホをいじれ！」

簡単な事例をあげよう。

山田詠美の「ひよこの眼」(『高等学校現代文B』)を教材に、学習者の疑問を解決する授業をしていたときのこと。「なぜ、ほかでもなく『ひよこ』の眼でなければならぬのか」という問いが、テキストの情報からだけでは解決できなくなつた。そこで学習者にスマホを使って検索させ、ひよこのもつメタファーを考えさせてみた。すると、「縁日」「ひよこ」で検索したある学習者がカラーひよこを探し出した。彼は、「ほとんどは

国語科と社会をつなぐ「ICT」



澤口 哲弥

三重県立津西高等学校

2. ICTがツールとして生きる場

電子黒板やデジタル教科書など、学習者が画面を通して情報を共有し、かつテキストの加筆修正や編み直しができる

生き続けられなかった」というネット上の記事を読み、そこから「幹生の死ぬしかない運命と縁日のひよこの運命が重なる」という解釈を、話し合いの結果出してきたのである。

同じようなことは評論を読んだときにもある。

岩井克人「マルジャーナの知恵」(『高等学校 国語総合 現代文編』)を扱った授業でのこと。あるクラスで「最後に『開け、ごま』を引用した筆者の意図がよくわからない」という疑問が学習者から出た。たしかに筆者の示す「差異の質的变化」を捉えることは論理の道筋をたどればわかるが、「開け、ごま」は明らかに論理がジャンプしており、テキストの外から情報を取り入れて考えないと難しい。そこで、皆でスマホを使って探索してみた。結果、「差異」「商売」で入力し検索したグループが「差異が儲けや成功につながる」というビジネス記事やブログの多いことに気づいた。そこでその情報をクラスで共有したところ、ある学習者から「差異を生み出す自分だけのアイデアが儲かるための暗号だよ、って言いたいんじゃない？」という解釈が出てきたのである。

デジタルツールは、今後、その活用をますます広げるはずである。筆者も「準ICT教育」として、次のような実践をしている。グループ学習のあとの各グループが書いた黒板上の答案をデジカメで撮影し、次の授業でその写真をプリントして(紙に頼るので「準」なのです)配布し検討材料とするといったローテクICT活用である。クラスによって同じではない学習者の反応を活かした授業を構築するのに、デジカメは必須の記憶&再生マシンである。学習者たちはそのプリントに気づいたことを書き込めるので、次の思考の場作りをすることができ

る。このようにICTの可能性は、一方的に「見せる」のではなく双方向のコミュニケーションや思考を共有し創作するツールとして機能する。アクティブ・ラーニングという対話型探究学習が人口に膾炙しつつある今こそ、その利用価値は高いと言えよう。

ただ、筆者が本稿で論じたいのは、実はこういった「紙でやっていたことを画面でやってみました」的なICT活用ではなく、もう少し根源的な授業改革を展望したICT活用にある。その展望とは、

4. ICTの可能性

授業者が用意した資料を皆で同じように読み、同じような思考を経て同じように「わかる」のではなく、学習者がそれぞれの検索方略で情報にアクセスし、それぞれから得た情報で問題解決に向けて取り組み「わらうとする」プロセスは、幅広い解釈や批判的な認識を生み出す可能性を秘める。

学習者の既有知識を支援する辞書として、あるいは写真、動画、記事、ブログなど社会的テキストを取り込む取水口として、スマホはなかなか便利な学習ツールである。授業中にスマホ?? などとおっしゃらず、ひとまず発想転換、初期投資不要のスマホ活用で、学習者のモチベーションアップや、テキストを社会に拡張する読みの実践に挑戦してみたいかがだろうか。

最後に、冒頭のICTの頭文字から見事に創作した知人に敬意を表して私も考えてみた。その答えは、

「インタラクティブ&クリティカル・テクノロジー」。